

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830047

研究課題名(和文)人形遣いのわざ伝承場面における身体的相互行為を手がかりとした「学び」モデルの構築

研究課題名(英文)Corporeal Interaction in Training Session of Body-Techniques for Reconstructing of Learning

研究代表者

奥井 遼 (Okui, Haruka)

京都大学・こころの未来研究センター・特定研究員

研究者番号：10636054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：淡路人形座における人形遣いたちの稽古場面に立ち会い、身を投じた彼らのやりとりを記述することで、知識伝達のあり方を根本的に見直し、新たな「学び」のありようを提示した。具体的には、メルロ=ポンティが展開した哲学的身体論が、わざの伝承場面において生じているミクロな出来事の意味を理解するための足がかりになることを明らかにした上で、教え手と学び手との間には、行為の模倣や同調といったやりとりが意図的あるいは非意図的に繰り返されており、こうした微細なやりとりそのものに目を向けることによって、「わざ」の伝承を、当事者たちの創意工夫を伴った、相方向的に遂行される生き生きとした営みとして捉え直した。

研究成果の概要(英文)：Observing and describing the training session of the master and the novice of puppeteers in Awaji Puppet troupe (Awaji Ningyo Za), we tried to reconsider and reconstruct the interactive process of learning. First, we investigated the possibility of using the Merleau-Ponty's phenomenological approach in understanding the meaning that emerges from bodily interactions, and that underpins the performance of the body during a training session. Second, focusing on the subtle interaction included their gesture and utterance, which appear intentionally or unintentionally in their training session, we found the session is corporative and vivid process which emerges from several different levels of meaning for their bodily experiences.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：わざ 身体的相互行為 人形遣い メルロ=ポンティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、暗記や計算といった知的作業を通して獲得されるような「情報」としての知識に対して、模倣や習慣といった身体的行為を通して獲得されるような「わざ」としての知識への関心が高まっている。こうした研究の高まりは、「身体による学び」という領域をゆるやかに形成し、「わざ言語」の発見による指導言語の解明(生田, 1987, 2011)、知識の「身体化 embodiment」(Johnson, 2008)の解明などの卓越した成果を上げるに至っている。

(2) だがその追求は未だ、今日的な教育観を根強く支えている「表象主義」からの脱却を遂げる段階には至っていない。「表象主義」とは、わざの習得を、あらかじめパッキングされた知識を個人から個人へと一方向的に伝えるかのように捉える見方である。こうした見方のもとでは、教え手は機械的に伝えるだけの人、学び手は機械的に受けとるだけの人、という静態的な図式に陥り、関係そのものの変化や、彼らの主体的な工夫を見落すことになる。「身体による学び」を原理的に解明する研究は、「頭で覚える」か「身体で覚える」という二元的区別を指摘するだけでなく、「表象主義」的な学習観を根本的に脱却する学びの探求へと向かうべきである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、哲学的身体論が洗練させてきた眼差しを引き継いで、わざの伝承場面の観察を重ね、当事者たちの身体的な相互行為の意味の編み目を解きほぐし、わざの伝承という場面に生起している出来事の全体を捉え直すことを目的にしている。

(2) 具体的には、淡路人形座(兵庫県南あわじ市・人形浄瑠璃の一座)の人形遣いの稽古場面における身体的相互行為に着目し、それを手がかりとした「学び」のありようを記述する。それは、知識の伝承が、当事者たちが身をおく相互行為の影響関係の中で達成されることを描き出す着眼点である。教え手から学び手へと伝わる知識は、表象・概念として伝達されるよりも以前に、しぐさや身ぶりによる相互行為空間において伝承される。その行為空間もまた、特定の時間的・空間的文脈に規定されており、たえず変化の中に置かれている。淡路人形座の事例は、伝統芸能の継承という、共同体の時間的・空間的文脈を背負った、厚みのある学びである。この立体的な構造を捉えることで、知識の伝達が、機械的・一方向的なものではなく、当事者たちの工夫を伴った、また、学び手のみならず教え手もが変わっていくような、相方向的で創造的な営みとして捉え直されることになるだろう。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、学びを成立させている身体的相互行為の働きを明らかにするために、淡路人形座におけるわざの伝承事例を対象としてフィールド調査を行った。一年目はフィールド調査を集中的に行い、二年目はフィールド調査を補完的に継続しながら、メルロ=ポンティの現象学的身体論を方法とした記述を試みた。

(2) 調査対象は、淡路人形座の「復活公演」の取り組みである。淡路人形座では、今日において途絶えている古典的な演目を、残された床本とテープを手がかりに「復活」させる取り組み(平成25年2月公演)を行っていた。そこで本研究では、「復活公演」に向けた稽古を対象とした調査を進めた。平成24年6月から8月にかけて、配役の決定、人形の頭と衣装の選択、演出の提案などに関する協議に列席し、舞台の構想を把握した。その上で、10月から1月にかけて、人形座の座員が、実際に振り付けを稽古する場面を観察した。2月には、総稽古と公演当日の場面に立ち会って、それまでの稽古が結実するさまを観察した。参与観察・インタビューを重ね、彼らの身体的な相互行為(身ぶり、会話、模倣や同調)を記録していくことで、人形遣いたちが、未知の振り付けを習得していく学びの場面を描き出すことを試みた。

(3) 2年目は、1年目に得たフィールド調査の成果に対して、ビデオ・ICレコーダーを用いた会話分析、動作解析を試みることによって、身体的相互行為空間の記述を試みた。その方法として、本研究では現象学的手法を用いた。ここでいう現象学的手法とは、当人の自覚に先立って身体が獲得している雑多な意味を把握し、記述することを可能にする視点である(Merleau-Ponty, 1945)。本研究では、人と人との関係構造を支えている行為空間を設定し、それらの意味の編み目を記述する手法として用いた。とりわけ、わざの伝承に参与する人形遣いたちの身体動作をつぶさに観察し、それぞれが帯びている意味を読み解きながら記述を進めていった。

## 4. 研究成果

(1) フィールドワーク: 2012年4月から2014年3月までの2年間のうち、淡路人形座への調査を49回行った。内訳は、淡路人形座(兵庫県南あわじ市)に稽古・公演を含め43回、三原中学校(同市)に4回、淡路人形座の出張公演(宮崎県延岡市)に2回である。

また、2013年8月には、オランダのユトレヒト大学が提供する集中講義に参加し、現象学的教育学を先駆的に進めてきたユトレヒト学派の研究の蓄積に触れた。経験を記述するために現象学を用いてきた研究者たちと交流することで、教育学の枠組みに限らず、身体的実践を描き出すための足がかりを得た。

## (2) 稽古場面の記述

### 生き生きとした身体的やりとり

人形遣いたちの稽古場面を記述する方法として、会話の文字起こし、および状況のイラスト化を行い、彼らのやりとりを綿密に記述することを試みた。座員たちのミクロなやりとりを解きほぐすことによって、わざを学ぶということに含まれる、生き生きとした身体的なやりとりと、学びの重層性が明らかになった。それは、近代教育が忘却してきた暗黙的な身体の働きに光を当て、「身体的能力の向上」ばかりを強調する学習観を見直すという、教育学における大きな挑戦に向けた小さな端緒である。本成果は、9th International CORPUS Symposium (Taipei National University of the Arts, Taipei, Taiwan, May 24, 2013)、および、PRACTICES AND THEIR BODIES: 2nd Mainz Symposium of the Social & Cultural Studies (Johannes Gutenberg University, Mainz, Germany, April 25, 2013)における発表として結実した。

### 言葉と身ぶりの相補的な働き

わざを伝えるということは、言語によって定式化する仕方ではなく、実際にやってみせる仕方ではしか達成できないこと、および、言葉だけでは意味をなさない言葉が、身ぶりを伴うことで豊かな意味を帯び、雄弁な身体的なやりとりの中でわざの伝承が行なわれることが明らかになった。

同時に、人形遣いたちの稽古において、分析的思考は必ずしも動作を阻害するものではないことも明らかになった。しばしば分析的思考は、わざの遂行の前には無力であると語られることが多い。しかしながら、実際の稽古では、言語による明示的な固定作用を必要とする場面が見られた。つまり、彼らは分析的に動作を意味付けることによって、茫漠とした一連のしぐさを分節し、擬態語を伴いながら一つ一つ順を追って辿ることによって、新たな型を獲得したのである。分析と動作とは、必ずしも反目しあうだけではなく、ときには対立的に、ときには相補的に、場面によって変化しながら関わり合うのである。本成果は、『こころの未来』9号への投稿、および、第10回身心変容技法研究会（京都大学こころの未来研究センター、2013年1月31日）での発表へと結実した。

### 学びの重層性

「わざの習得」といえば、一連の動作から構成される「型」を身につけていく過程を想定するが、少なくとも本事例においては、個々の型を身につけることは中心的な課題ではない。それ以上に大きな課題は、型と型との「接続」である。ある「型」ができるようになるという事態は、決められたルールに則って舞うことのみを指すのではなく、むしろ、適切なタイミングで、適切な場面で、適

切な組み合わせで舞うことができることを指す。稽古は、一見、ひとつの「型」や「しぐさ」を習得していく過程として映るが、それは同時に、型の運用方法を学ぶ過程でもある。型の動きが出来るようになる過程と、「流れ」や「間」を感知できるようになる過程とは、原理的に区別できない。つまり、稽古は、動作としての振りを身につける場であると同時に、振りと振りとの間の調整をたえず行い、焦点化することなく「流れ」や「間」に対する感性を磨くものとして機能している。稽古とは、重層的にいくつもの「学び」が折り重なっている場であるといえよう。成果は、『ホリスティック教育研究』16号への論文掲載に結実した。

### 人形遣いたちの身体図式

人形遣いは、人形の頭と右手（頭遣い）、左手（左遣い）、足（足遣い）を分担しながら人形を操る。あたかも人間が舞っているかのようなしぐさを生み出すためには、個人の技量はもちろん、人形遣い同士の円滑な連携が要求される。その複雑な連携を可能にするために、彼らは「ズ」と呼ばれる意思伝達システムを用いる。「ズ」とは、頭遣いが発する合図であり、他の二人を動かすための時間的空間的「間合い」のことを指す。また、型を外れたしぐさが突発的に課されたときも、人形遣いは人形の身体に即した自然な動きを遂行する。こうした事態を敷衍するならば、人形遣いたちは、各自で独立した操作感覚の中で人形を操るだけではなく、人形の身体としてまとまりのある図式に身をおいていると考えることができる。メルロ=ポンティは、身体的行為のまとまりは、必ずしも個としての身体に限定されるものではなく、自分の身体の外へ、例えば杖の先や帽子の突端へと延びることを解明し、そのような身体の働きを身体図式（schéma corporel）の動的な働きと見なした（Merleau-Ponty, *ibid.*）。人形遣いたちの経験を記述する場合、メルロ=ポンティの思索を拡張させて、一人の身体を越えて、人形を起点とした、三人の身体によって相互的に形成される図式、すなわち「間-身体図式」を想定することができる。操作感覚を共有しながら人形を操る彼らの身体の働きを解明することは、わざ研究のモデルケースの一つとなるであろう。本成果は、『Bodies & Folklore(s): Legacies, Constructions & Performances』(2012年)への寄稿に結実した。

## (3) 臨床教育学としてのメルロ=ポンティの読み直し

上記のような考察は、メルロ=ポンティ哲学の読み直しにもつながる。これまで教育学が身体に向けてきた関心の多くは、身体を「教育の対象」と見なすものであったが、メルロ=ポンティがいうように、人は日常的なコミュニケーション場面において、相方向的で、未だ明確な意図を持たない、それでいて

関係構造に大きく寄与する身体的行為の相互作用に身をさらしている (Merleau-Ponty, ibid.)。教育の場面においても、教え手と学び手との間に、自覚する以前の相互作用が働くのであれば、そうした行為空間こそ、教育的事象を成立させるための土壌と見なせるのではないであろうか。とするならば、身体とは、教育的意図をすり抜けて絶えず他者や環境と相互作用を繰り返し、教育的な働きかけを下支えしているのである。こうした観点は、暗黙的なわざの様相を記述することに寄与するのみならず、教育的な関わりについての根本的な再考を可能にするに違いない。本成果は、『教育哲学研究』107号への論文投稿として結実した。

#### (4) 博士論文の完成

本研究の一部は、博士論文(「わざの臨床教育学—淡路人形座における人形遣いの稽古および興行に関する現象学的記述」京都大学教育学研究科博士学位論文、平成26年3月)の主要な構成部分へと結実した。なお、博士論文は、加筆・修正の後、本研究の成果の一つとして、平成26年度中に出版される予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計7件)

奥井遼「身体化された行為者 (embodied agent) としての学び手—メルロ=ポンティにおける『身体』概念を手がかりとした学びの探求」『教育哲学研究』、107号、2013年、pp.60-78.【査読有】

Okui, Haruka. “Subject, Language and Body: Merleau-Ponty’s Phenomenology in Educational Studies,” *Record of Clinical-Philosophical Pedagogy*, 12, 2013, pp.58-62.【査読無】

奥井遼「苔の行、あるいは身心変容技法—羽黒修験・秋の峰に関する身体論的考察」『身心変容技法研究』、2号、2013年、pp.123-131.【査読無】

奥井遼「身ぶりと言葉による『学び』—人形遣いのわざ習得場面における行為空間の記述」『ホリスティック教育研究』、16号、2013年、pp.69-82.【査読有】

奥井遼「身体知の分節的経験—淡路人形座の稽古の場面から」『こころの未来』、9号、2012年、pp.42-45.【査読無】

Okui, Haruka. 「Body and the Understanding of Others: Phenomenology of Language in Merleau-Ponty」『臨床教育人間学』、11号、

2012年、pp.75-81.【査読無】

奥井遼「『沈黙の声』にみる身体的志向性—わざ研究へのメルロ=ポンティ現象学からの接近」『京都大学大学院教育学研究科紀要』、58号、2012年、pp.183-193.【査読有】

#### [学会発表](計7件)

Okui, Haruka. “The critical attack: A Moment of Meaningfulness,” Utrecht Summer School 2013: Phenomenology of Practice and the Tradition of the Utrecht School. (Utrecht University, Utrecht, Netherlands, August 1, 2013.)

Okui, Haruka. “The Complex and Tacit Structures Underpinning Bodily Skills: Training for Awaji Puppet Theatre,” 9th International CORPUS Symposium. (Taipei National University of the Arts, Taipei, Taiwan, May 24, 2013.)

Okui, Haruka. “Puppet, the Lived Body: Sustained Collaboration in Animating a Puppet in the Awaji Theatre,” PRACTICES AND THEIR BODIES: 2nd Mainz Symposium of the Social & Cultural Studies, (Johannes Gutenberg University, Mainz, Germany, April 25, 2013.)

奥井遼「伝統と心—久高島の神人・淡路島の人形」淡路三原ロータリークラブ50周年記念講演会、2013年2月23日(招待講演)。

奥井遼「淡路島の人形浄瑠璃と身心変容技法」第10回身心変容技法研究会(京都大学こころの未来研究センター、2013年1月31日)。

Okui, Haruka. “Phenomenological description of embodied experience: A case of puppet performance in Japan,” The 30th International Congress of Psychology. (Cape Town, South Africa, July 24, 2012.)

奥井遼「身体化された行為者 (embodied agent) としての学び手—メルロ=ポンティの『身体』概念を手がかりとした学びの構造」第55回教育哲学学会大会(早稲田大学、東京、2012年9月17日)。

#### [図書](計1件)

Okui, Haruka. “Who Is Manipulating the Puppet?: A Phenomenological Analysis of Puppet Performances on Awaji Island, Japan,” (eds.) D. D. Benavides & F. Duhart, *Bodies & Folklore(s): Legacies, Constructions & Performances*, (Lima-Perú,

R&F Publicaciones y Servicios,) 2012,  
pp.75-83.

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

奥井 遼 (OKUI, Haruka)  
京都大学こころの未来研究センター・特定  
研究員  
研究者番号：10636054

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：